

古今集声点本における多拍語動詞のアクセント

——古今集動詞のアクセント 承前——

秋 永 一 枝

(本稿のキーワード) 古今集声点本・多拍語動詞のアクセント・動詞の命令形・○○型・しむ・陣む・すさぶ

六 終止形・連体形とも三拍の語

活用形がすべて三拍のグループで、「かかり・然り」のラ行変格の二語を除き四拍活用動詞である。次の三種類一六語に声点の注記がみられる。

I 当る・至る^x・浮かぶ^x・送る・驕る^だ・遅ふ^だ・斯かり^か・翔る^か・

託つ^か・通ふ^か・易る^か・括る^か・下る^x・くねる^x・(横ほり)くやる^x・暮す^x・比ぶ^か・凍る^か・離る^か・探る^か・慕ふ^か・沈む^か・偲ふ^か・

濡づ(つ)・添はす^か・添はる^か・た折る^か・滾つ^か・溜まる^か・散らす^か・慎む^か・積もる^か・鳴らす^か・並ぶ^か・濡らす^か・上る^x・羽ぶく^か・

拾ふ^か・増さる^か・結ぶ^か・も鳴く^か・呼ばふ^か・渡る^x・

II 出だす^x・厭ふ^か・移す^x・疎む^か・嬰ぐ^か・撰ぶ^か・起る^x・惜しむ^x・

覚す^x・思ふ^x・下ろす^か・返す^か・帰る^x・掛かる^か・挿頭す^か・被く^か・潜く^か・潜る^か・降つ^か・崩す^か・疊る^か・臥す^か・さやく

(ぐ)・騒ぐ^か・然り^x・沈く^し・凌ぐ^し・絞る^し・過ぐす^し・住まふ^し・
そよぐ^か・賜ふ^か・類ふ^か・手繰る^か・祟る^か・迎る^か・頼む^x・給ふ^x・
作る^か・包む^か・照らす^x・通す^か・どよむ^か・歎く^か・習ふ^か・馴らす^か・
均す^か・匂ふ^x・根差す^か・残る^か・走る^か・払ふ^x・響く^か・ふむむ^か・
旧す^か・申す^x・紛ふ^か・交る^か・待たく^か・急ぐ^か・跨ぐ^か・迷ふ^か・乱
る^か・休む^か・淀む^か・婚ふ^か・

III 隠す^か・隠る^か・被く^か・聞く^か・背く^か・願ふ^か・願ふ^か・龍る^か (但しII型にも。十は『四座研究』ではII型に入る)

『四座研究』にはIII型がないが、「示す」類の○○○型がある。このグループもまた両者に共通の語彙は少なく21116で約18.1%にすぎない。III型は連体形四拍の次項とまとめて考察することにし、それぞれの活用別に代表例を上げて問題点のみを考察することにする。

1 終止形

一般形Ⅰ型〈上上平〉注記(●●○型) 至る…増さる…
一般形Ⅱ型〈平平上〉注記(○○●型) 作る…乱る…
特殊形Ⅱ型〈平平平〉注記(○○○型) 照らす(べらなり)・
まどふ(べらなり)

一般形Ⅰ型の例外として、引用の「と」の接続する「至ると・渡ると・偲ぶとも」に二拍動詞と同様高平型がみられる(→前稿四・1)。また、特殊形Ⅱ型になりそうなものだが、『平平上』注記のものに「乱る(べらなれ)」23(毘)・「惜しむ(べらなり)」877(毘・高貞)がある。これは「べらなり」が「べし」から遊離し、『毘』本注記の当時日常語としては使用されなかったためであらう。

2 連体形

Ⅰ型〈上上上〉注記(●●●型) 当たる…沈む…

Ⅱ型〈平平上〉注記(○○●型) 思ふ…頼む…

ⅠⅡ型は他の頭昭本でも安定しており問題がない。

3 連用形

一般形Ⅰ型〈上上平〉注記(●●○型)

(イ) 中止形・複合動詞前部成素 (狩り)暮し…積り…
遠からず右の声になったかと思われるものに「斯かり」がある。

(とすれば)かゝり¹⁰⁶⁰ 上上上 永(踊り字の声は疑問)

「斯く」は古今集や『観本名義』で〈上上平〉、「有り」は〈平上〉であるから、〈上上平上〉から●○○●●●型となり、終止形・連用形ともに一時的にはこのアクセントが存在したと思

う。古写本で〈上上平平〉の差声があれば●○○●から●○○型が出来たことも、「振り出づ」〈上上平上〉から「振りづ」〈上上平平〉ができたようにあり得ないことはない。だが、『永』本の注記は比較的古い姿をとどめているので、この●●●●型から安定型である●○○型に変化し、更に後世●○○型に至ったものと思う。

奥村氏の『平曲研究』272頁では、「然り」と共に「示す」類に入る。古今集に「示す」〈上上平平〉はないが、この語は『四座研究』376頁によれば「そのシメはシメユフ・シメナハのシメで、神聖な場所としてある範圍をかぎる意」とある。だが、万葉集で「標野」のメは乙類、「示す」のメは甲類であり、同語源とは考えにくい。その上、「標」のアクセントは、『観本名義』の「標」の訓、『袖』の「シメ(ユフ)・シメ(ノウチニ)」、『後拾』の「シメ(ユヒシ)」、「浄拾」の「しめ(ゆふ)」が全例〈平平平〉であるほか、『袖』の「シメシノ・シメチカハラ」も〈平平平〉、動詞とした「シメ(ハヤシ)」は〈平上平〉である。「標」は「占む」〈平上平〉の派生名詞であらう。一方「示す」は「令」の訓「シム」〈平上平〉(前本色葉)のシメにサ変動詞の「為」がつき〈上上上平〉●○○●型となり、鎌倉期には複合が強くなって●○○型となった。「シム」(若本字鏡・観本高本名義)には〈上上上平〉とあり、使役の助動詞「しむ」も同源と思う。『袖』には「もだ(もあらむ)」に〈上上平〉があり、同じ頃「もだす」も同様のアクセント変化を とげたと思われる。

(ロ) 一般付属語接続 (さかえ) 踊り(て)…た折り(ても)…
「たをる」が高起式であるのは、「手」が語源であることが忘

れられ、接頭語の「た」と混同したためであらうこと既に書いた(↓『研究篇上』133頁)。「も鳴きて」(上上上上) (頭天平533*)は、「万葉」352「哭鳴而」を「喪鳴而」と誤読したためか。「袖」**K**にも(上上上上)とあり、同じ頭昭本の解釈であることが知られる。

特殊形I型(上上上) 注記(●●●型) 結び(しにより)

『散』613に「変りし」が同じく(上上上上)で差声される。

一般形II型(平上上) 注記(○○○型)

(イ) 中止形・複合動詞前部成素 思ひ(をれば) … 歎き…

(ロ) 一般付属語接続 思ひ(て) … 迷ひ(こそ) …

特殊形II型(平上上) (○○○型) 思ひ(し)

『後拾』168に「野がひし」(平上上上)が、『袖』に「斎ひし」(平上上上)があり一致する。

4 已然形

I型(上上上) 注記(●●●型) 溜まれ(は)・障め(ども) …

II型(平上上) 注記(○○○型) 思(は)・包め(ども) …

ここで、II型の「包む」の他にI型に「障む」を入れたのは、十二56の歌「つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり」による。「包む」は名義抄諸本・岩崎本字鏡等が(平上上)と(二)類であり、同根とされる「慎しむ」も殆どが同じく低起式の(平上上)である。古今集では400425865の「包む」がすべて低起式であるのに、556「つつめども」のみが左のように低起式と高起式があり、『浄拾』40の「浅緑野辺の霞はつゝめどもこぼれてにほふ花さくらかな」もまた(上上上)と高起式である。

低起式 平上上…毘・高貞、 平平平…伏片・京秘
高起式 上上上…永(墨点)・毘(頭注)・訓、 上上上…寂(清

聞)

かつて築島裕氏は『浄拾』の(上上上)とあるのは疑はしい。「平平…」が正しいのであらう。」と記されたが、この二首に共通するのはともに物を「包む」意ではなくて、内々に包み隠しておくものが溢れてこぼれでる白玉(涙)であり、花桜の色香である。差声者は、そこに単なる「包む」ではない「こもり、はばかり」意を示したかったのではあるまいか。「恙が」は『観本名義』法中44ウ(86)に(上上上)とあり、これと同根とされる「恙(障)む」は恐らくは(二)類(上上上)である。『岩波古語』などでは「慎み」も「障み・恙み」(四段)もともに「包み」と同根とあるが、『観本名義』ただ一例の「恙が」の音が正しければ、「包む」と「障む」は別の語源としてよからう。ともかく鎌倉以降別の意義・別のアクセントと考えられていたことは「つゝめども 雖裏とかけり それを人をつゝむにそへたり」(京秘)、(清聞)とあることから明らかである。

5 未然形

一般形I型(上上上) 注記(●●●型) 送ら(さらむ)・拾は

(は)

一般形II型(平上上) 注記(○○○型) 絞ら(せらまし)・習

は(せらなむ)

特殊形I型(上上上) 注記(●●●型) 至ら(ぬ) … 呼はは

III	II	I	終 止 形		連 体 形	連 用 形			已 然 形	未 然 形		語 例
			一 般	特 殊		一 般 (イ)	一 般 (ロ)	特 殊		一 般	特 殊	
○ ● ○	○ ○ ●	● ● ○			○ [†] ● ○	○ ● ○	○ [†] ● ○	○ [†] ● ○	○ ● ○	○ [†] ● ○	○ [†] ● ○	(一)類 当る・暮す… (二)類 思ふ・帰る… (三)類 隠る・罷る…
○ [†] ○ [†] ○ [†] ?	○ [†] ○ [†] ○ [†]	● [†] ● [†] ● [†]			○ [†] ● [†] ○ [†]	○ [†] ● [†] ○ [†]	○ [†] ● [†] ○ [†]	○ [†] ● [†] ○ [†] ?	○ [†] ● [†] ○ [†]	○ [†] ● [†] ○ [†]	○ [†] ● [†] ○ [†] ?	

特殊形II型《平平平》注記(○○○型) 思は(め)…婚は(む)

I型の例外として「至ら(ぬ)」「93(伏片・▲家)のへ上上平」や、「うとま(れぬ)」「1032の『毘』のへ上上平」、『高貞』の《平平上》がある。「うとまれぬ」147(○○○上平平)(毘・梅)の「うと」の部分は仮名書きであるにもかかわらず差声がなく、へ上上上《平平上》のいずれを意図したか不明である。『岩本字鏡・凶本名義』などで「うとし」は《上上平》、『凶本名義』で「うとむず」は《上上平》であるから、「うとむ」は(一)類の《上上上平》が望ましい。『毘・梅』の《○○○上》は、『永』の《上上上》、『高貞』の《平平上》のいずれにも当時発音されたためといえるかもしれない。

「よばふ」539にはI II両型が注記される。539は「うちわびてよばはむ声に山彦の答へぬ山はあらじとぞ思ふ」であるから「呼

ぶ」が望ましく、『毘・▲高貞・†寂』の《上上上》が合致する。

『訓』の《平平上》は「夜這ふ」の声である。『袖』京本・前本には伊勢物語「たのむのかり」の注に「よばひけり」《平平上》○○○が差される。「よばふ」の用字と声点に関して名義抄・色葉字類抄等を援用した山田俊雄氏の論考にくわしく、山口佳紀氏(4)にその紹介があるが引用文献名は脱落している。『訓』は当時「婚ふ」《平平上》が多用されていたために「呼ばはむ」と差声すべきところを「婚はむ」と混同して差声したもので、「婚はむ声に」と解釈したわけではなからう。以上をまとめると表5のようになる。

七 終止形三拍・連体形四拍の語

このグループに属するのは次の三種類四四語である。

I 後(遅)る・遣す・聞こゆ・栄ゆ・忍ぶ・手向く・戯る
仕ふ・止む・名付く・始む・忘る

II 饒る・合はす・納む[×]・言出[×]・定む[×]・萎る[×]・すさむ・食ぶ[×]・類ふ[×]・尋ぬ[×]・咎む[×]・響む[×]・眺む[×]・流る[×]・述べふ[×]・はつる[×]・離る[×]・深む[×]・燻ぶ[×]・乱る[×]・目がる[×]・詣づ[×]・紅葉づ[×]・若ゆ[×]・別る

III 隠る[×]・生ひ出[×]・漕ぎ出[×]・待ち出[×](但しII型にも)

IV 水馴る[×]・振り出[×]・寝覚む

『四座研究』にはこの他に「乗す」●●●型・「変す」○○●型・「愛す・信す」○○●型のような、漢語にサ変動詞が接続したグループがあり、真に多彩である。古今集の真名序にも差声のあるものがあって、「感^シ鬼神」へ上上平(毘)・「論^テ」へ去(毘)・「吟^{スル}」へ平(伏片)などがあるが、これらは漢字に注記されるのみで、活用語尾に差声なく、動詞の扱いを避けた。このグループも両者に共通の語彙は少なく、1144で25%にすぎない。また、このグループは派生語や複合語を含むが、特に別だてとはしなかった。(三)類と同じアクセント型をとる「待ち出」の類も、複合した形としてここに含めた。このほかに《上上平》の型として「水馴る・振り出」を認めたいと思う。III IVの型は「終止形連体形とも三拍の語」とまとめて考察することにす。

1 終止形

一般形I型《上上平》注記(●●●型) 仕ふ(とて)

一般形III型《上上平》注記(○○●型) 隠る(と) …

2 連体形

I型《上上上上》注記(●●●●型) たはるる・たむくる

II型《平上上上》注記(○○○○●型) だよむる・ふすぶる …

III型《平上平平》(○○○○●型)と《平上上上》(○○●●●型)の両様注記 詣づる

『四座研究』ではIII型の連体形を○○●●●型と推定されたが、古今集では両様と認めた。

3 連用形

一般形I型《上上平》注記(●●●●型)

(イ) 中止形・複合動詞前部成素 聞こえ(つがなむ) …

(ロ) 一般付属語接続 おくれ(て) … 聞え(ける) …

特殊形I型《上上上》注記(●●●●型) (せきな)とどめ(そ)

「な…そ」は特殊形をとる場合と一般形をとる場合と両様であること既に書いた。

一般形II型《平上上》注記(○○●●型)

(イ) 中止形・複合動詞前部成素 もみぢ(そめけむ) …

(ロ) 一般付属語接続 深め(て)・もみぢ(つつ) …

特殊形II型《平上平》注記(○○○○型) 言で(しは)

一般形III型《上上平》注記(○○●●型)

(イ) 中止形・複合動詞前部成素 生ひで(くる)

(ロ) 一般付属語接続 隠れ(たる)・待ち出(つつ) …

一般形IV型《上上平》注記(●●○○型)

(イ) 中止形・複合動詞前部成素 み馴れ(そめけむ)

(ロ) 一般付属語接続 振り出(つつ)

4 已然形

I型《上上上上》注記 忍ぶれば519上上上上平 毘・▲高貞

II型《平上上上》及び《平上平上》注記 流るれ581 平上上上

梅、しをるれば(4) 平平平平 訓、249 ○○○
上○ 毘

『四座研究』ではI型は●●●○型、II型は○○○●型と推定されたが、I型の高平注記・II型の低平注記からは●●●●型・○○○●型の存在が考えられる。

5 未然形

一般形I型《上上上》注記(●●●型) (駒も) すさめ(ず)^平

892 永(墨圈点) …

特殊形I型《上上上》注記(●●●型) (思ひ) たはれ(む)

246 伏片他: …

一般形II型《平平上》注記(○○●型) (駒も) すさめ(ず)^平

892 訓・梅: …

特殊形II型《平平上》注記(○○○型) (人も) すさめ(ぬ)^上

50 毘・目がれ(ぬ) 45 伏片: …

「すさぶ(上二・四段)」は『前本色葉・観本名義』で「荒」の訓に《上上平》とあり、『観本・鎮本名義』の派生名詞も《上上○》と高起式である。一方「すさまじ」は『観本・鎮本名義』で《平平平上》であり、語源的に別であらうこと既に書いた(『研究篇上』344頁)。「袖」京本・前本の「(駒も) すさめぬ」も《平平上》と低起式である。「すさむ(他動下二)」では古今に限らず「すさめぬ・すさめず」のように否定の助動詞をつけて価値観がマイナスのイメージになる用法が目立つ。そこから「すさむ」は四段・下二段ともに否定の助動詞を伴わずとも「遠ざける・いとふ」というような用法が生れたものと思われる。それは「す

さぶ・すさび」のブラスイメージの用法よりも「すさまじ」の白けたマイナスイメージの用法に近く、「すさまじ」にひかれてアは低起式となり、音韻もバ行からマ行へとb m交替が行なわれたものと思われる。

ここで、金田一氏が「四座講式」(大慈院本)に語例がなく、名義抄・日本書紀などにある型として推定形を示された、「歩く」類・「もたぐ」類の○○●●型について考えたい。「歩く」類は終止形・連体形とも三拍の「隠す・背く・罷る」が、「もたぐ」類は連体形が四拍の「掲ぐ・隠る・瀆る・捧ぐ・疲る・捕ふ・詣づ・擡ぐ」が示されており、特殊形を○○○型、已然形をそれぞれ○○●●型・○○○○型と推定された(『四座研究』379・388頁)。これに対し奥村氏は中世前期頃の「もたぐ」類の已然形を○○●●型とされたほか、「体系論的観点から」両類の「特殊形はやはり、未然形と同様の○○●●型であって然るべき」とされ、更に名義抄や古今集に現れる特殊形の○○○型は、金田一氏も擡れを指摘される第(二)類の「動ク類・恐ル類の特殊形と見るべきかも知れない」と書かれた(『平曲研究』367・389頁)。

但しここで奥村氏が特殊形の平平平型として上げた例は、殆どが複合語や室町以降のものである。例えば「炙(炙)り(物)・隠れ(道)・「隠れ(遊び)」「(観本名義)」「隠れ処(訓)」「隠れ沼(毘・高貞・寂・京秘・梅)は明らかに複合名詞の声点である。また古今集37の「罷り申しければ」には「罷り申しければ」の写本もあり、頭照本では統けて「受領ノクタルヨシマイリテマウスラハマカリマウシトイヘリ」に同一の差声をする。これもともに複合語

で扱うべきである。更に「選ばせ」の(○○平○) (天恵・尊恵)は室町の并惠本であるから、○○○型を意図したというより「ば」と濁音によむことを示したと見るほうがよい。●○○型に変化した形を示したと考えられないでもないが、その前後の差声からみると濁指示と見るほうがよさそうである(↓「資料篇」63頁)。すると残りは「背か(れ)」「梅」・「隠れ(ぬ)」「訓」のみで、「炙ら(ん)」「淨拾」は不明ということになろう。

そこで以下、古今集によって院政期から鎌倉期の第(三)類の移行の状態を示したい。古今集では第(三)類で安定しているグループと活用形によって第(二)類に移りつつあるグループとがある。「もたぐ」類は「複合動詞で、○○○型のもと●○○型のものとのが合したものは、この型になった」(『四座研究』387頁)とされている。この中には複合して間もないものもあれば、古く複合して一般には複合語という意識では発音されなくなったものもある。前者は○○○型で安定しているが、後者は時代が下るにつれて、低起式で多数形の(二)類○○○型と混同するようになる。前者に「生ひづ・漕ぎづ・待ちづ」(《平上平》)があり、これは二拍(二)類動詞連用形○○○型に「出づ」○○○型がつき、母音連続をきらって[i]が脱落したものである。「待ちいでづるかな」691には《平上平上平上○○○》(毘・▲高貞)のように前後部動詞のアを生かした差声がされるが、左記では一語化したものと思われる。

- 生ひで(来る) 478 平上平(平上) 顯天平
- 漕ぎで(なむ) 669 平上平(○○) 訓
- 待ちで(つる) 691 平上平(○○) 問答

一方、二拍(二)類動詞●○○型に「出づ」がついた「振り出づ」が前後部部を生かした差声から次第に一語としてのまとまりをもつ差声に変化してゆく。

- ① 振りいでゝぞ 148 上平上上平 訓、上平○上平 毘↓

『資料篇』

- ② 振りいでつゝ 598 上平上上○○ 訓、上上○○○○ 高貞
- ③ 振りいでゝ 598 上上上上上 寂、上上○○○○ 毘
- ④ 振りいでゝぞ 148 上平上上○ 永
- ⑤ 振りいでつゝ 598 上平上上上 顯天平

①の「毘」はその注から考えると、既に[i]が脱落していたための差声のようである。①②の『訓』は二語連接だが、②③の『寂・毘・▲高貞』は中間の低い部分が高くなって一語になろうとした形か。④の『永』はまだ複合に至らないが、⑤は「出」の部分が高くなって一語になった型と思う。ちょうど、「示す」の《上平上》が複合が強くなって《上上平平》になったり、「水馴る・寝覚む」などが《上上平上》から《上上平平》に変化してゆくと同様の過程であろう。但し「寝覚む」は●○○○型かもしれない。

次に、複合が早くて第(二)類に移行するものが多いグループを活用別に掲げ、その後に語彙による相違を考えたい。

- 1 終止形一般
- Ⅲ 《平上平》(四段) 背く(まひさ) 顯府(39)*、(二段) (老) 隠る(やと) 36 毘、Ⅲ 《平上○○》(二段) 隠る(と) 672 毘・▲高貞、(老) 隠る(やと) 36 訓
- Ⅱ 《平上上》(四段) 隠す(らむ) 79 毘

2 連体形(末尾の「隠る」は四段、下二段、終止、連体の諸説あり表外とする)

III 《平上上上》(二段) 詣づる 986。寂

《平上平上》(二段) 詣づる 42。毘

II 《平上上》(四段) (山) 隠す 413 伏片・家、(深き窓に) 隠す(集) 後拾 35、(漕ぎ) 隠る 1073 毘・高貞

(但し《平平去》)

3 連用形一般

III 《平上平》(四段) (影) 隠し 846 訓、被き(つるかな) (83)

毘、せめき(けむ) 903 伊・高嘉・京中・寂

梅…、願ひ 27 問答、罷り(て) 843 訓、罷り

(ける) 415 毘、罷り(たりける) 645 毘、(身) 罷

り(にければ) 412 毘、(二段) 隠れ(たる)

(20) 寂、隠れ(なむ) 953 毘・高貞・訓、隠れ

(なむと) 884 訓(ともに「な」は「ぬ」の未然)

II 《平上平》(四段) 隠し(てよ) 174 毘、願ひ 27 訓、(二

段) (ゆき) 疲れ 袖 京、隠れ(たる) (20)

梅、(な) 隠れ(そ) 淨拾 534 (但し《平上〇》)

III か二語連接か不明のものに「せめきけむ」がある。

4 已然形(四段)

III 《平上〇》 罷れ(りける) 297。332。毘

II 《平上平》 隠せ(ども) 885 訓、隠せ(る) 淨拾 III

5 未然形一般

II 《平上平》(四段) まから(ざるなり) 顕大 385 *

未然形特殊

II か III か《平平平》(四段) 背か(れなくに) 936 梅、(二段) 隠れ(ぬ、打消) 918 訓

右を語別・出典別・品詞別にまとめると次のようになる(分母は活用別資料数、分子はその延べ数を示す)。これらを望月氏の『名義抄索引』によって検索すると、『被く』は項なく、「罷る・詣づ」は III 型のみだがその他は少数例ながらすべてに II 型を見出すことができる。『御巫私記』もまた「詣づ」が III 型のみ、「隠る」は III 型が多いが II 型も一例、「願ふ」は II 型のみ、「隠す」は II 型という状態である。同書の「罷り」は III 型だが未然特殊の「罷ら(む)」が《平平平》で、古今集同様、未然特殊の所属を定めかねた。だが「隠る・罷る」は III 型が殆どであるから、特殊形も III 型と考えることが妥当ではあるまいか。桜井茂治氏によれば鎌倉アクセントである『八祖祭文』でも「隠す」が II 型であり、『四座』をはじめ、『古今・拾遺・後拾遺』とも殆どが II 型に変化しているから「隠す」の個別の変化はかなり早いことになる。古今では他の語の II 型は一本ずつで、「罷る・隠る・詣づ」などは変化が遅かったようだ。但し「せめく」に諸本が III 型を差すたぐいは、定家本の移点が殆どであり鎌倉末まで III 型だったという証明とはなり得ない。『四座・大慈院本』に III 型を欠くのは、京都以外の方言を記したというより II 型への移行が早かった「隠す・願ふ・背く」のような語があつて「罷る・詣づ」のような語を含まないためではなかったか。更に推論すれば、辞書や和歌の差声には底本や相伝の比較的古めかしいアが好まれるが、声明の作曲の際にはそうした考慮はなされないのではなからうか。変化の早か

表 6

三四				終止形		連用形		已然形		未然形		語例
IV	III	II	I	一般	特殊	一般(イ)	一般(ロ)	一般	特殊	一般	特殊	
● [†] ○ ○	○ ● ○	○ [†] ○ ●	● [†] ● ○	● ○ ○	● ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ [†] ○	○ ○ [†] ○	(一)類 聞ゆ・忘る… (二)類 眺む・別る… (三)類 隠る・詣づ… (四) 水馴る・振り出
● [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ [†] ○	○ ○ [†] ○	
● [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ [†] ○	○ ○ [†] ○	
○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ [†] ○	○ ○ [†] ○	
○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ [†] ○	○ ○ [†] ○	
○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ [†] ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ [†] ○	○ ○ [†] ○	

<p>詣づ 疲る 隠る (二段) 罷る 願ふ 背く せめく 被く 隠す (四段)</p> <p>III型 (止 4/3、体 2/2、用 15/11)</p> <p>訓(用) 毘(用)〔名義項なし〕 伊(用)、寂(用)、梅(用) 頭(止) 問答(用) 毘(用 3)、訓(用)、毘(已)〔高・観名、法 III のみ〕 毘(止 2)、訓(止)、毘(用)、寂(用)、訓(用 3) 毘(体)、寂(体)〔図・観名、御巫私記 III のみ〕</p>	<p>II型 (止 1/1、体 2/2、用 5/5、已 2/2、未 1/1)</p> <p>毘(止)、伏片(体)、頭後拾(体)、毘(用)、訓(已)、淨拾(已)〔四座〕 〔四座〕 訓(用)〔御巫私記・四座 II のみ〕 頭(未) 梅(用)、淨拾(用) 頭袖(用)</p>
--	---

った「隠す」を除いて活用形をみると、終止形・連用形は比較的变化がおそいようである。これは付属語を伴わない言い切りの形が多いことによるうか。

以上、終止三拍・連体四拍の動詞をまとめると、表6のようになる。

八 終止形・連体形とも四拍の語

活用形がすべて四拍の語としては、次の五五語に声点が注記される。これらはその殆んどが複合形で、前部後部のいろいろな組合せて七種の型が存在する。

朝だつ・欺く・天霧る*・天照る・天飛ぶ(枕)・誤つ・あは立つ・憐れぶ・誘ふ*・いぶかる・色付く・色取る・失ふ*・移ろふ・後らす・怠る・押照る(枕)・輝く・掻鳴す・畏む・片敷く・固まる・愛しぶ・加はる・木伝ふ・坂ゆく・しな照る*(枕)・(陳み付く)・(菜み付く)・そは降る*・高知る・糊びく・たゆたふ*・貫く・手習ふ・留まる*・甲ふ・中絶ゆ(長鳴く?)・慰む・なまめく*・習はす・匂はす・賑はふ・宣ふ・広まる*・はふ(ぶ)らす・惑はす・見栄やす(身罷る)・目並ぶ・物思ふ・休らふ・行き交ふ・横ほる*(身罷る)・(毘)は二語として扱った。また、「吹き捲く」は二語か
「吹きます」は声点消去とした。↓『資料篇』394頁)

このグループは「四座講式」では三五語に譜記があるにもかかわらず、古今集の差声語と合致するのはたった三語である。三拍語までは基本的な語が多かったためこれほどの不一致はなかった

が、四拍以上ともなると和歌和文の世界の特徴があらわれてくる。以下それぞれの活用別に考察する。尚ここでは「押しなむ」のように二語に分かれて差声された複合動詞は原則としてそれれの項に送ってある。また枕詞は一括して別に考察する。

1 終止形

- 一般形I型《上上上平》注記(●●●●型) 十愛しぶ(10)
- 一般形II型《平平上平》注記(○○●●型) 移ろふ(らめど)

726

一般形III型《平平上上》注記(○○●●型) 匂はす239
III型の「匂はす」を他動四段とみず、未然形プラス「す」とみることもできるが、他の活用形から考えて一語として扱った。この型は「四座講式」にはみられない。

2 連体形

- I型《上上上上》注記(●●●●型) 欺く・たなびく…
 - II型《平平上上》注記(○○●●型) 色どる・あまぎる…
- I型には「袖」に「たゆたふ」、「散」に「葉のぼる・鼻ぶく」があり、II型には「袖」に「いさよふ」、「後拾」に「あさ引く」して打つ、「散」に「す通る」などがある。連濁している「たなびく」「色どる・あまぎる・あまぎる」の類は四拍語と推定できるが、「手習ふ」や「あさ引く」して打つ「す通る」の《平平上上》注記は二語の連接とそれなくもない。弱い複合を始めていた過程と今考えておく。

- IV型《平平上上》注記(○○●●型) あまぎる・坂行く(菜行く)との懸詞)

『四座研究』397頁では『淨拾』の「あまとぶ」(平平上上)を二語に分析しての声点とされるが、体言プラス動詞のこの類は、Ⅱ型に連濁するものもあり、Ⅴ型も含めて弱い複合をし始めていたと考えた。

Ⅴ型《平上上上》注記(○○●●●型) 目ならぶ・掻き鳴す
Ⅵ型《上上平平》注記(○○●○○型) 掻きなす

「掻き鳴す(琴)」56の『顕天平・毘・▲高貞・寂・十京秘・十永』がⅤ型であるのに、『訓』のみがⅥ型である。前者が複合が弱く二語の連接とも思われるが、『訓』は完全に一語化したとみたい。但し、「着なす・住みなす」などの「なす」と混同して差声したことも考えられないではない。

Ⅶ型《上上平平》注記(●○○○○型)
連用形の「のたうぶ」の連体形があればこの類であろう。「あは立つ」116(「栗田」を隠す)《上上○○》(毘)は《上上平平》か《上上平平》か不明だが、淡々とたつ意で一語と考えた。

3 連用形

- 一般形Ⅰ型《上上上上》(●●●○○型)
- (イ) 中止形・複合動詞前部成素 横ほり(ふせる) …
 - (ロ) 一般付属語接続 怠り(て)・たなびき(にけり) …
- Ⅰ型の例は他の顕昭本にも「逆葺き(袖)・そはぶりて(袖)・散)・たなしり(袖)・散ろぼひて(散)・轟きて(散)」などがあ

る。

一般形Ⅱ型《平平上上》注記(○○●○○型)

- (イ) 中止形・複合動詞前部成素 いぶかり(思ひて) …

(ロ) 一般付属語接続 朝だち(て)・色づき(にけり) …

一般形Ⅲ型《平平上上》注記(○○○○●型)

(イ)に「物もひ」(顕天平526*)があり、この類は「名義」の「物食ふ」(平平上上)よりも複合が強いとみた。(ロ)に「色づき」(にけり)、「訓107」256は《○○平上》、「色づき(ぬれば)」「198(訓○○平上)があり、これも連濁するところから四拍語と考えた。

一般形Ⅳ型《平平上上》注記(○○●●●型)

「凶名・観名」の「慶」の訓に「にぎはひ」(平平○○)とあるが、これは名詞であろうし、「にぎはふ」は「観名」から《平平上上》と推定されるが、「偽り・いざなひ・にぎはひ」の動詞の連用形及び名詞に《平平上上》が存在したのであること既に書いた(『研究篇上』112頁)。右の差声が顕昭本であることも、安定型になる前の古い型であるかと想像される。

一般形Ⅶ型《上上平平》(●○○○○型か●○○○○型か?)

のたうびける589《上上平平○○》梅、《○○平平○○》毘・

▲高貞

顕昭注『拾遺』には「ノ給ケル」の振仮名に《平平上上》とあり、前本等の書紀や『御巫私記』も「のたまふ」に《上上平平上上》を差し、これらは明らかに二語の連続である。それが『四座』になると「のたまはく」が《斗十斗十》《斗十斗十》の両様となり、金田一氏も書かれるように「宣ふ」は二語にも一語(●○○○○)にも発音される(390頁)ようになった。ここでは語源について論じるのは避けるが、「のた(う)ぶ」の類には左記の例がみられ、

すべて二語連続の差声である。

「のたぶ」へ上平上↓（観本名義）、「のたうばく」へ上平平上上↑
 （図本・鎮本・観本名義）、「のたばく」へ上平上上上↓（岩本字鏡）、
 「のたむて」へ上平上上↑（巫私記）

なお、「たうびける」385（寂）はへ平平上上○○○であり、「のた
 うぶ」も頭昭本に差声があれば恐らくへ上平平上↑のように二語
 連続であったろう。「のたうび（ける）」の『毘・梅』などが「ひ」
 に上声を差さなかったことは、その頃既に一語となっていたため
 と思われる。但し『梅』が「ひ」に単点を差すのは、「のたまひ
 ける」を意図したものかもしれない。

表 7

		終 止 形									連 用 形		未 然 形		語 例				
		一 般		特 殊		連 体 形			一 般 (イ)	一 般 (ロ)	特 殊	已 然 形		一 般		特 殊			
		●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(一) 輝く・固まる… 移ろふ・いぶかる 包はす・物もふ… にぎはふ 目並ぶ・掻き鳴す 掻き鳴す のたうぶ… (二) 〇 (三) 〇 (四) 〇 (五) 〇 (六) 〇 (七) 〇
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

このほかに連用形一般としては「身罷りにければ」412がへ上平
 上平○○○○○『毘』があるが二語の連接とみる。連用形の特
 殊形は「しめ結びし」へ平平平平上↑『後拾』136があり、終止形は
 へ平平上平↓であろう。もし、二語の連続ならば「しめ結びし」
 はへ平平上上上↑になる筈で、これは既に複合しているものと思
 える。

4 已然形

I型へ上上上平↑注記(●●●●型)
 II型へ平平上平↑注記(○○●●型) 木づたへ(ば)…
 頭昭本では『後拾』45に「つのぐめば」があり、同じ差声であ

る。

5 未然形(特殊形のみ)

特殊形I型《上上上上》注記(●●●●型) おくらさ(むや

は)...

特殊形II型《平平平平》注記(○○○○型) いざなは(れつ

つ)...

以上をまとめると表7のようになる。

九 終止形四拍・連体形五拍の語

このグループに属するのは次の一五語である。

憧る・顕る^{あつく}・うらびる^{あらは}・訪る^{まじら}・溺る^{おぼ}・思ほゆ^{おもほ}・水隠る^{みづかく}・
 言伝つ^{ことつ}・中絶ゆ^{なかだ}・ながらふ^な・はかなむ^は?・振り出づ^{まは}・纏る^{まと}・
 (身隠る^{みかく})・水隠る^{みづかく}

後部成分が二段活用の四拍動詞は辞書などでは数が多い。しかし、院政期から鎌倉期ではそれらは複合した形にならず、前後部

が独立したアクセントで発音されていたために次のように著しく例が少ない。

連用形一般I型《上上上上》注記(●●●●型) みがくれ

(て)...

II型《平平上平》注記(○○●○型) 顕はれ(て

て)...

III型《平平上上》注記(○○○○型) おもほえ

(て)...

未然形一般III型《平平上上》注記(○○○○型) おもほえ

(で)...

特殊I型《上上上上》注記(●●●●型) あくがれ

(む)...

特殊II型《平平平平》注記(○○○○型) ことつて

(む)

この他の型としては、高本『袖』に「うちはへて」《平上上上

表8

四・五	終止形		連体形	連用形			已然形	未然形		語例
	一般	特殊		一般(I)	一般(II)	特殊		一般	特殊	
III	○ [†] ○ ○ ●	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	(三) 思ほゆ
II	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	○ [†] ○ ○ ○	(二) 顕はる・言つ...
I	● [†] ● ● ○	● [†] ● ● ●	● [†] ● ● ●	● [†] ● ● ●	● [†] ● ● ●	● [†] ● ● ●	● [†] ● ● ●	● [†] ● ● ●	● [†] ● ● ●	(一) あくがる・訪る...

上」があり、注に「ウツタへハート云心坎」とある。「這ふ」は(一)類動詞だから、二語の連続ならば「平上平上上」が望ましい。古今では「うちむれて」126「平上上上上」(伏片)や「うちはへて」180「〇〇平上上」(昆)があり、126は二語の連続として扱ったが180は二語の連続とみるか「平上平上上」と一語とみるか疑問である。『袖』の差声が行なわれていたとしたら、「うちはへて」は動詞から副詞に移行したために二語の連続から一語の副詞としてのアクセントに変化したと考えるべきだろう。「うちつけ(に)」が「伏片・昆・訓」ともに「平上上上上」(上)となるのと同様の過程である(↓『研究篇上』384頁)。

このグループは、『四座研究』の例も連用形一般ⅠⅡ型と未然形一般Ⅱ型のみでいかにも例が少ないが、以上をまとめれば表8のようになる。

十 五拍動詞

ここでは活用の形式を問わず一括して声点注記例を掲げた。一般に五拍動詞とされるものの殆どは二語連続の声点が注記されているのでそれぞれの項に送り、ここでは派生語及び複合したとみられる次の一三語についてのみとりあげた。

改まる・裏返す・試みる・事無しふ(ぶ)・(水脈)遡る・島隠る(あら)・鋤き返す・立たず見る?・奉る(いや)・遠離る・調ほる・轟かす・見そなはず

このほか、五拍の枕詞としては以下の八詞があるが、二語連続のものが多く、流派による異なりもみられるので別に扱うことに

した。

しな離る・しもと結ふ・魂きはる・千早振る・まかね吹く・真孤刈る・八雲立つ・八隅知る

五拍語は意義の認定に問題のあるものもあり、二語の連続が複合動詞かは声点だけからは認定しにくいものもある。例えば「落ちたき(ぎ)つ(滝の)」928は「昆・高貞・京秘・訓」ともに「平上上上上」注記で、前後部二語連接の差声とも複合動詞の差声ともとれるわけである。然し、前部成分が高起式の「言ひ知らぬ」(平上上上上)638(昆・高貞)や「泣き恋ふる」(平上平上上)655(昆・高貞)、後部成分が低起式の「立ち馴らし」(平上平上上)1094(寂・昆)439等の差声から判断すると、当時は二語連接の扱いにしたほうがよいと考え、この類はこの項には含めていない。ところが顕昭注の『散』1256には「鳴り交はず(なり)」に「上上上上上」があり、複合したアクセントを示している。(なおこの「なり」は伝聞の助動詞であるから終止形接続である。)思うにこの語が「上上上上上」とならなかったのは、「見かはす・呼びかはす」のような「かはす」が既に補助動詞となっており複合の度合が強かったと解される。但し他の声点注記例が見当らず、『散』のこの差声が顕昭注記時のままか長流書写時の後入れかは不明というほかはない。

連体形Ⅰ型「上上上上上」注記(●●●●●型)

みをさかのはるとも(水脈遡) 上上上上上上上〇〇 顕天

平 567*

いやとほさかる(弥遠離) 819 上上上上上上上 昆・高貞

「みを」は諸本に〈上平〉とあるが(↓『研究篇上』73頁)、『顯天平』に〈上上〉が二例ある。但しともに「水尾」の振仮名への差声であることが問題だが、一例は「水尾ともかけり」の例なので一応「みを・さかのほる」と二語の声点と考えた。「遠ざかる」は連濁するが、枕詞の「しなさかる(こし)〈上上上上上〉(顯大)370.*はアクセントは同じだが連濁していない。但し万葉では「射」文字で連濁形である。他に顯昭注の『後拾』393に「鳥屋がへる」〈上上上上上〉がある。後部成素の「のぼる・さかる」は(一)類動詞〈上上上平〉、「返る」は(二)類動詞〈平平上〉だが、後者も前部成素の●●型と複合の度合が強いア型を示している。但しその語が示しているア型と連濁の有無とは複合度を考える上で必ずしも同じ次元で扱ってはならないこと言うまでもない。複合してそのア型ができた際には連濁してないものが、移点の際や後入れて双点となることは屢々ある。

低起式の例では枕詞に「たまきはる」〈平平平平上〉(顯天平)568*があるが、二語連続か否か疑問。むしろ「秋風の吹き裏返す葛の葉の」383の「かへす」の箇所に『昆・高貞』が〈平平上〉、『寂』が〈平○○〉を差していることから、「裏返す」の〈平平平平上〉は五拍動詞と考えたい。但しこの語は弁恵の伝授では「カヘス」と清音であり、天理本『延五記』では変化形の〈上上平○〉を差し、兼載の『古今私秘聞』では「返スノカノ字清ヘシ他家ニハ濁也」と書く。この伝授では「裏・返す」〈平平・平平上〉の変化形である〈上上平・上上平〉で発音したもののようである。

連用形一般I型(イ)〈上上上上上〉注記(●●●●○型)

みそなはし(61) 上上上上平 顯府、上上○○○ 伏片
ふみとどろかし701 ○○○上上○○○ 梅、○○○平平○○○
寂

この類、『後拾』267には「とやがへり」〈上上上上上平〉がある。

「ふみとどろかし」は諸本によりアが一定せず、〈上上平平平平上平〉(明德本神代紀)・〈上上上上上上上平〉(乾元紀私記)がある。

なお『御巫私記』は「ふみとどろかす」に〈上上上上上上上平〉を差す。「とどろ(に)」は『伏片・家・永・昆』160、『昆・高貞』1002がすべて〈上上上上〉だが、『寂・梅』160が〈上上上〉を注記する(『研究篇上』414頁)。「轟く」は『親本名義』が終止形〈上上上○○〉、『御巫私記』が連用形〈上上上上上〉とあり、顯昭注『袖』

京本「とどろける」には〈上上上上上平〉とあり、『寂・梅』以外
は高起式である。「とどろ」には 寂恵の生育時に 伝統的な●●●●型の他に新しい型である○○●●型があったとすれば、「轟く・轟かす」にも当然高起式と低起式の両様が存在したことが考えられ、それが『寂』や『明德本神代紀』(一三九一年書写)の「轟かし」の○○○○●●型となって現れたものだろうか。○○●●●●●●型とならなかったのは、これが稀な型だったからではあるまいか。

連用形一般II型(イ)〈平平平平上平〉注記(○○○○●●○型)

ととのほり(21) 平平平平上平 顯府・伏片・家
しまがくれ(ゆく)(36) ○○○上上平 寂

「鳥」は〈平平平〉であるから、「鳥隠れ(行く)」は〈平平平平上平〉で問題ない。このほかにIII型として「奉り」〈上上上上上平〉

表 9

終止形			連体形	連用形			已然形	未然形		語例
一般	特殊			一般(イ)	一般(ウ)	特殊		一般	特殊	
I	●●●●● ○	○●●●● ○	●●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	(イ) 遡る・遠ざかる… 裏がへす・調はる	
II	○●●●● ○	○●●●● ○	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	(ウ) 奉る	
III	○●●●● ○	○●●●● ○	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	○●●●●	(ハ) 奉る	

が一例ある。これは詞書の「奉りたりけるを」の声だが、『訓』は「:タテマツリ」として差声する。「たり:」が省略とみれば連用形(ウ)の例となる。この語は「立て」へ平上」と「まつる」へ上上平」の複合形で、『観本名義・御巫私記』の終止形・連用形ともにへ上上上上平」であるから二語連続と言えなくもない。だが平安初期から「宍ひ奉る・迎へ奉る」のような補助動詞の例もあることであり、複合動詞として扱ふこととした。古今集に例はないが、同じ後部成分をもつものに「つかまつる」がある。この語は「つかへまつる」へ上上上上平」(岩本推古紀)のような二語の連続から、複合して一語になる過程で左のような揺れがみられる。

「つかりまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○
 「つかまつる」へ上上○○○○○

このほか已然形は「改まれども」28 へ平平平上平○○○(毘)へ○○○上平○○○(寂)の一例のみである。「あらたむ」が『図本名義・観本名義・岩本字鏡』でへ平平上上平」注記であるから、その派生形はへ平平上上平」で合致する。

上一段は未然形特殊の「試みる」一例のため表出してない。
 ころみ 平平平上平(毘)・高貞 518、平平上○○○(訓) 568
 勿論この語は「心」へ平平上」と「見る」へ上上」との複合語で、『図本・観本・鎮本名義』に「ころみる」へ平平平上上」と「御巫私記」に「ころみ(たまへ)」にへ平平上上」という一語になった差声がなされる。古今集も『毘』は同様だが、『訓』は二語に分けた声点を打とうとしたものか。ともあれ未然形特殊は○○○○○型としてよからう。以上をまとめれば表9のようになる。

十一 命令形

辞書類や仏教関係の資料に用例の乏しいものに、動詞の命令形

がある。古今集ではわずかながら左のような声点注記がみられる。これに顯昭注の諸本を加え、更に名義抄等を参照して考察してみた。

一 I (山かつら) 為よ[※]1076 (平上平) 訓 (袖九191 (平上平) 京本)、

平上 伏片、(うるはしみ) せよ (袖三51 (平上平) 高本 ■ 京本)、(いかに) せよとか461 (平上平) 伏片・
▲家

一 II 寄り来^七1078 (平上平) 顯天片・顯大、来てふに692 (平上平) 訓、(平上平) 梅、(平上平) 毘・高貞

二 I (塵に) 継げとや1003 (平上平) 顯天片・毘・高貞・寂・梅、(平上平) 永 (墨点)、(君) 坐せと (後拾17 (平上平))

二 II (つづり) 刺せてふ1028 (平上平) 顯天片、(棹) 差せと (袖十一 233 (平上平) 京本・前本)、やよや待て152 (平上平) 伏片・家・毘・寂・伊・高嘉・京中・梅、(袖廿480 高本 ■ も同声)、152 (平上平) 京秘、待てと70 (平上平) 伏片・梅、(拾遺387 も同声)、待ててはば739 (平上平) 伏片・家、(平上平) 天片、(足) 折れ739 (平上平) 毘・高貞

二 III (沖に) 居れ1094 (平上平) 顯天片・顯大・毘

二 III I (燃えば) 燃え1028 (平上平) 伏片・永 (朱)・寂、(去平) 毘・高貞

二 III II (塵に) 付けとや1003 (平上平) 訓、避きよと99 (平上平) 伏片、(平上平) 梅、(平上平) 伊・高嘉・

▲京中・寂

二 III III 往ねか (平上平) 問答803*、恋ひ死ねと526 (平上平)

○ 毘・高貞、(平上平) 訓

三 I 偲へとぞ996 (平上平) 毘・高貞、(平上平) 顯天片、鳴き奢れ (散267 (平上平))

三 II 移せ425 (平上平) 伏片・家・毘・京秘・訓、(散りかひ) 曇れ349 (平上平) 毘・訓・梅、(平上平) 伏片、申せ1091 (平上平) 顯天片・顯大

三四 I 止めよ385 (平上平) 伏片

三四 II 定めよ646 (平上平) 訓

四 I さへづれ (後拾160 (平上平))

四 II いざなへ (袖十七 394 (平上平) 高本 ■ 天本)

四五 I 這ひまづはれよ119 (平上平) 伏片・家・毘 右のうち、「塵につけとや」は顯昭本その他が真名序の「継塵」と合致する「継げ」の解釈で、ケに双点のある「平上」注記だが、『訓』のみは「付・着」の解釈でケは単点の「平上」注記である。「山かつらせよ」の『伏片』は「平上」で『訓・袖』や『御巫私記』の「平上」と合致しないが、『為』は平声輕 (平) と記したものでらう。助詞の「よ」はまだ複合が弱く、『神代紀』

「(浜つ) 千鳥よ」に乾元本が「平上平東」、明德本が「平上平上」を差声するところからみても平声輕 (平) 型だったろう。即ち「せよ」は (平) 型に発音されていたが次第に複合の度合

が強くなり、「よ」固有の型を失なって (平) 型に変化していったものと思われる。「よ」を含め助詞の接続に関しては別稿とする。

が強く、「よ」固有の型を失なって (平) 型に変化していったものと思われる。「よ」を含め助詞の接続に関しては別稿とする。

表10 命令形／以下は古今及び顕昭本以外の例

一 一拍語、二・一拍語

- (一)類 ●○○ (為::着、⁺●○○)▽▽▽ (為よ::着よ)
- (二)類 ○●● (来::見、⁺○○●)▽▽▽ (来よ::見よ)

二・二 二拍語 (以下助詞「よ」のアクセントは省略する)

- (一)類 ●○○ (繼げ・坐せ／及^しけ・焚^け)
- (二)類 ○○○ (差せ・刺せ・待て・折れ／打て・取れ)
- (三)類 ●○○ (居れ)

二・三 三拍語

- (一)類 ●○○ (燃え)
- (二)類 ○○○ (付け・避^きぎ) (よ)
- (三)類 ●○○ (往ね・死ね)

三・三 三拍語

- (一)類 ●○○ (偲べ・奢れ／坐^よせ)
- (二)類 ○○○ (移せ・曇れ・申せ／帰れ・許せ)
- (三)類 ○○○ (罷れ)
- (四)類 ●○○ (示せ)

三・四 四拍語

- (一)類 ●○○ (とどめ) (よ)
- (二)類 ○○○ (定め) (よ) / 息^へ (よ)
- (三)類 ○○○ (隠れ) (よ)

四・四 四拍語

- (一)類 ●○○ (さくづれ)
- (二)類 ○○○ (いざなへ)

この他『観本名義・高本名義・岩本字鏡』に「イネ(行の訓)」「上平」、『御巫私記』に「かへれと(帰)」「上平上平」、『浄拾』に「来てふ」「上平上平」1103・「まづ焚け」「上平上平」396・「いませ(座)」「上上上平」430がある。書紀前本等には「及け」「上平」・「打て」「上平上」・「罷れ」「上平上平」・「息へよ」「上平上平」がある。また「取れ」(前本他)の「上平」・「許せ(とや)」「(凶本他)の「上平上平」は、末尾の平軽声を「上平」と差声したものだらう。この他に「示せ」があれば恐らく「上上上平」になるはずで、三拍語までの殆どの命令形の型が揃うことになる。(二)類動詞の命令形の末尾の拍が下降調であることは、早く南不二男氏の高知方言からの推論があり、その後の小松英雄氏の文献による確認、以上を勘案した金田一春彦氏の発展があり、現代京阪式諸方言からも首肯できる。これらをまとめれば表10のようになる。

尚、引用文献等は前稿に準じる。

- (注) (1) 『永治二年本古今集声点注記資料ならびに声点付語彙索引』正誤表参照。
- (2) 「浄弁本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」『国語アクセント論叢』
- (3) 「今昔物語校注の覚え書二則」『成城文芸27』昭36・10
- (4) 「語源とアクセント——いわゆる金田一法則の例外をめぐって——」『松村明教授古稀記念国語研究論集』
- (5) 拙稿「注釈をよむ——顕昭「袖中抄」の声点から1——」『国文学研究』96、昭63・10参照。
- (6) 『中世京都アクセントの史的研究』一二五―四頁。

(7) 声点の伝授の方法や、差声者の生育時・生育地により、

助詞の付属語への移行状態が異なること言うまでもない。

『訓』の助詞の「て」が他書に比して卓立型が少ないのも、

著者の度会延明が恐らく伊勢度会郡で生育したのであろうこ

とと無関係ではあるまい。現代でも京都の中心部や瀬戸内

の佐柳島等々で助詞を卓立させて発音する人の多いのは、

単にイントネーションの問題とは言い難い。

(8) 「名義抄時代の京都方言に於ける二字四段活用動詞のア

クセント」(『国語学』27、昭31・12)

(9) 「平安末期畿内方言の音調体系(Ⅱ)」71頁(『国語学』40、

昭35・3)

(10) 「平声軽の点について」(『国語学』41、昭35・8)

新刊紹介

金井英雄編

『補志記 語彙篇 博士付和語索引』

(アクセント史資料索引第九号)

新義真言宗の論議参考書として知られる

『補志記』は、そこに記された多くの声点

や節博士によって、はやくから学界に注目

されてきた。同書は(『語彙篇』(実際(解説)

篇)の両篇から成り、現在「貞享版」と「元

禄版」との二種の刊本が伝わっている。

本索引は、(『語彙篇』)の和語のみを対象

とするが、底本を厳選しているうえに、語

音と墨譜との対応の様子を手書きによって

正確に示してあり、ここにはじめて信頼し

て利用し得る索引を手にかけることができた

のである。

『補志記』は、室町から江戸初頃の京都

または京都周辺のアクセントを反映する資

料とされるが、たとえば「緑」に●○と

○●○同様と考えられる博士がみえたり、

また付載の(『実際篇』)影印(白)では「思(へ)

に(微角徴徴)の博士が認められることな

ど、アクセント資料として実に興味深い。

(平1・3 アクセント史資料研究会 A

5判 一二三頁 二〇〇〇円)〔上野和昭〕

佐藤栄作編

『アクセント史関係方言録音資料』

(アクセント史資料索引別冊)

京都アクセントの史的变化解明に寄与す

るところ大と思われる近畿・四国地方の方

言アクセントを調査・録音したもののうち、

十地方十二地点を選び、テープ編集し、文

字化資料を付したもの。調査及び録音は秋

永一枝・上野和昭・佐藤栄作・坂本清恵が

行い、面倒なテープの制作は、水野信義が

担当した。すでに調査者によって論文発表

等がなされているものも含まれるが、編者

が改めて聴き取り、音調提示を行って

いる。また、冊子巻末に、地点間の比較が容

易に看取できるアクセント一覧表も付され

ており、便利である。アクセント調査資料

は、文字化と同時に録音資料を公開すべき

であるという、アクセント史資料研究会代

表・秋永一枝の方針のもとに刊行されたも

のであり、今後の方言アクセントの発表形

態のあり方を示したものと見える。

(平1・3 アクセント史資料研究会 A

5判 七六頁 六十分・九十分テープ各一

巻 四〇〇〇円) 〔坂本清恵〕

入手御希望のむきは、アクセント史資料

研究会(早大文学部秋永研究室気付)まで